

良寛に学ぶ教育者としての姿勢 —愛語より初めて—

平宮 正志*

Attitude as a educator learning from 良寛 Love word as starting point

Masashi HIRAMIYA

要旨 本論文は、良寛の生きざま（良寛に関する逸話や自身が書き残した書簡や詩歌）の中で、教育者としての務めを遂行する上で参考になるものを抽出すると同時に、抽出事項に考察を加えることにより教育者としての認識を深めることを目的に執筆したものである。

結果として、①「愛語」の反復、②囚われの少ない生きざま（キャリア）、③自己愛、④使命感、⑤実践への努力（言葉ではなく実践で示す）、⑥「戒語」への戒め、⑦地域密着（郷土愛・自然愛）、⑧子どもと戯れる（ボランティア活動）、⑨やさしさの意識（気）の循環、⑩涙、⑪わかちあい（両親との愛の交流）の11項目が抽出された。さらに11項目それぞれに対して、教育学、カウンセリング心理学、禅、その他の学問領域より考察を加えた。

キーワード：良寛 愛のある教育 愛語 戒語 使命感

1. はじめに

自身、高校教諭として17年間勤務した後、スクールカウンセラーに準じる者として勤務して今年で7年目となる。

教師なら身の回りにモデルとなる先輩もいるが、スクールカウンセラーはそれぞれの学校に1名という配属がほとんどであり、先輩カウンセラーの言動やアセスメント、介入の仕方を学ぶという機会はほとんどない。そこで私の場合、特に参考になったのが良寛の生きざまである。それは又、教育者としての自身の姿勢を振り返る機会になるものでもあった。

なお良寛は、江戸時代末期の禅僧である。もともと日本人らしい日本人ともいわれている（中園，1994, p. 3）。師である国仙和尚より印可の偈（禅僧の修了証書）を授けられながらも寺の住職にな

ることもなく、子どもと戯れ、詩歌と書を愛し、托鉢をしながら地域（新潟県出雲崎付近）の人々とともに生きた人物である。

ちなみに著者自身、これまでに良寛に関して執筆した論文としては『良寛を通しての道德教育 —学習指導要領の改訂告示をふまえて—』（平宮，2009a）、『教育とカウンセリングの視点よりみた日本の詩歌の歴史的一考察 —読書療法、詩歌療法、poetry therapyの起源と現状を列記して—』（平宮，2010a）、『実存主義とサティ理論をふまえての生徒指導 —愛のある教育を目指して—』（平宮，2010b）がある。

2. 問題

現代は、テレビやインターネット等、言葉の氾濫する時代である。それと同時に、言葉を媒介としたいじめ（会沢・平宮，2008a, 2008b, 2009）等の反社会的言動も後を絶たない。

*ひらみや まさし 文教大学教育学部非常勤講師

ちなみに政府統計の総合窓口における平成6年度から平成17年度までのいじめの発生件数（公立小・中・高等・特殊教育諸学校）は、その数は減少傾向にあるものの平成17年度で3万8千件を上回っている（独立行政法人統計センター、2009）。なお養老（2004, pp. 48-50）は、常識の通じない死を前提とした人間のたちの悪さを指摘しているが、何が人々をしてそのような傾向に向かわせるのか、しっかり検証されなければならないとも思う。

それと同時に、戦後の急激な欧米化の流れの中で、都会に人々が集中し、日本人としてのアイデンティティが失われつつあるようにも思う。又グローバル化の流れの中で、市場競争原理が日本全土に浸透している。さらには、テレビやインターネットが、地方に生きる人々の意向や慣習を考慮することもなく、地方独自の文化や思潮を半強制的に操作しているようにも思われる。

なおテレビの害についてはWalsh（1994）や和田（2010）が指摘しているが、暴力、セックス、自己中心的、無礼の問題、さらには不良の礼賛やミクロの発想での世の中の語り等、多岐にわたるようである。換言すれば、暴力や道化（茶化し）等のシーンが、自我の十分に確立されていない子ども達の模倣の対象になるということでもある。

3. 目的

良寛の生きざま（良寛に関する逸話や自身が書き残した書簡や詩歌）の中で、教育者としての務めを遂行する上で参考になるものを抽出すると同時に、抽出事項に考察を加えることにより教育者としての認識を深める。

4. 方法

良寛に関して記載された書籍等の検索を通して、教育者の姿勢として参考になるものを抽出すると同時に、教育学、カウンセリング心理学、

禅、その他の学問領域の知見を交えて抽出された事項に考察を加える。

ちなみに竹村（2008, p. 180）は、いろいろな学問研究の境界領域が重なるところに新しい創造的分野が生まれていると記しているが、著者自身、多様な観点より良寛の生きざまを考察することにより、より深く教育者としての姿勢を学ぶことができるものと考ええる。

5. 結果

良寛に関する書籍等を検索して結果、以下のような事項が抽出された。

- (1) 「愛語」の反復
- (2) 囚われの少ない生きざま（キャリア）
- (3) 自己愛
- (4) 使命感
- (5) 実践への努力（言葉ではなく実践で示す）
- (6) 「戒語」への戒め
- (7) 地域密着（郷土愛・自然愛）
- (8) 子どもと戯れる（ボランティア活動）
- (9) やさしさの意識（気）の循環
- (10) 涙
- (11) わかちあい（両親との愛の交流）

6. 考察

結果に対するそれぞれの考察は以下の通りである。教育学、カウンセリング心理学、禅、その他の学問領域の知見を交えて考察する。

(1) 「愛語」の反復

カウンセラーや教師が用いる個別面接の技法としては、受容、繰り返し、質問、支持、明確化、チューニング、ポジティブ・メッセージ、リフレーミング、メタフォリカル・アプローチなどの言語的技法、さらには視線、表情、ジェスチャー、声の調子、身体接触（スキンシップ）等の非言語的技法がよく知られている（会沢、2010、平宮、

2009b). また技法の統合モデルとしては, Allen Iveyのマイクロカウンセリング, Robert Carkhuffのヘルピング技法, 國分康孝命名によるコピーカップ方式(國分, 1996)等がある.

なお良寛自身, 言葉づかいや他者と接するときの態度として, 道元禅師の愛語を特に尊重したようである. なお愛語とは, 『正法眼蔵』中の「菩提薩埵四摂法」に出てくる以下の言葉である. 中園(1994, pp. 80-81)が, 中村宗一著『全訳正法眼蔵』より転記したものを以下に記載する.

「愛語」ということは, 人々に接した時に先ず慈愛の心を起こし, 相手の心になって慈悲の言葉をかけることである. 一切の暴言・悪言を吐いてはならない. 世間では相手の安否を問う礼儀が行われる. 仏道でも「珍重」とか「不審」と目上の人に対する挨拶の礼儀がある. また人々に接する時には赤子に接するような慈悲, 愛撫の心を以て言葉を交わすことが「愛語」の行いである. 人の徳あることは大いにほめたたえるべきである. 徳のない人は気の毒な人として哀れんでやることである.

愛語を好み, 施すことによって愛語の行いは広げられ, 日頃知られていなかった愛語も, かくされていた愛語も現前するようになる.

人々は, 現在の生命のあらん限り, 心から愛語の徳を行すべきである. このことを未来永遠に一步も退くことなく誓い願いつつ行うべきである.

愛語の徳行は仇敵を降伏させ, 常に敵視し合っている国王らをも和睦させて, 世界平和の基礎とすることは実に愛語を以て根本とするのである. 人と相対して愛語を聞くことはその顔を喜ばせ, 心を楽しくする. かげでその人の愛語を聞くのは, 相対している時よりも一層深く肝に銘じ魂を打ってうれしいものである.

知るべきである. 愛語は必ず愛の心からお

こるものであることを. 愛の心は慈悲の心を種子としている. 愛語は天をひっくりかえす超越的な力であることを学ぶべきである. 愛語は相手の長所を絶賛する以上の功德があるのである.

以上が, 道元禅師の愛語である. なお中園(1994, p. 90)は, 良寛が本当に目指したものとして, 愛語の心を実践し, それが広まることにはあったのではないかと述べている. また國分・國分(1987)は, これからの男性に必要な資質の一つとして「やさしさの許容」をあげている. すなわち, 男性が内に秘めている女性らしさ(やさしさ, 情感的反応)を発揮することにより, 人格が完成されるというのである. さらに竹村(2002, p. 45)は, 昔の君主は優れた人材を抜擢し功績があれば恩賞を与える前に, まず自分の徳を高めて, 心の底から人びとを愛したとも述べている.

なお良寛の書簡の中に, 解良叔問宛の乞食の貧窮を見るに見かねての紹介状がある(久馬, 2010, pp. 35-41). 相手と接するときの言葉や態度への配慮という点から考察して, 良寛の愛語への配慮や実践は, 小学校新学習指導要領・生きる力 第3章道徳 第2内容〔第1学年及び第2学年〕『主として他の人とのかわりに関すること』の中の「(2) 幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し, 親切にする.」(文部科学省, 2011)に通じる心構えであり実践である.

ちなみに著者自身, 先に紹介した論文『実存主義とサティ理論をふまえての生徒指導 ―愛のある教育を目指して―』(平宮, 2010b)の中で, 実存主義的に生きテnderネスタブーに陥らなかった人物として良寛を紹介したが, その根拠のひとつとして「愛語」への関心を取り上げた. ちなみにテnderネスタブーとは, Suttie (1935)の愛の関係論の中に出てくる用語で, 自身の中にある愛の感情を表現することへの禁止令のことである. 具体的には, 男の子が女の子みたいといわれるのが嫌で, 無理に粗暴にふるまっている心情

や態度等が相当する。さらに養老(2003, pp. 176-204)を参考にするならば、テnderネスタブーとは、一元論的にやさしさの指針がおちよくりや強圧的な態度に振り切れた状態といえるとも思う。

愛語を反復使用した良寛は、テnderネスタブーとは程遠い人物だったものと推察される。なお村上(2008, p. 170)は、日本独自の言葉に共通するものとして、感謝と利他(おかげさま、いただきます、ありがとう、もったいない)を挙げているが、これなども愛語に通じる心持ちといえるであろう。さらに竹村(2002, p. 182)は、荀子の思想をもとに善行を積み上げることの重要性を強調しているが、我々教育者は、この愛をささげ続ける良寛の姿勢より、愛に支えられた教育を継続することの重要性を再認識すべきだとも思う。

(2) 囚われの少ない生きざま(キャリア)

「災難にあう時節には災難にあうのがよいのです。死ぬ時節には死ぬのがいいのです。これはつまり、災難を避ける最もよい方法なのです。(松本, 2009, p. 38)」三条の大震災の後、親戚に送った手紙の文面である。禅では、生死がともに仏性であること、すなわち生死という分別、はからいから解放されることを説いている(有馬, 2010, pp. 190-202)。この良寛の手紙は、ある意味、禅のそうした教えを比喩的に表現したものとも受け止められる。

なお地域の子どもと遊ぶ良寛は、周りの気の無い大人から様々なニュアンスのいじめを受けていたようでもある。ただ良寛は、それさえも受け流している(松本, 2009, pp. 74-76)。ちなみに禅では、執着から離れた生きざまを奨励している(有馬, 2010, pp. 38-45)。良寛の囚われの少ない生きざま(キャリア)は、ある意味、禅の思想から受け継いだものとも推察される。

ちなみに精神分析の防衛機制に、感情を生々しく表現するのが怖くて物事を抽象化して表現する「知性化」がある(國分, 1980, p. 53)。それに

対して禅では、理性の執着から解放された「空」や「無」になることを奨励している。

一例として、一休禅師は「極楽など行きたくない。極楽へ行ったら面白からぬだろう。地獄の方がどんなに面白いかわからぬ」(有馬, 2010, pp. 84-86)と述べている。これを著者なりに解釈するならば、自分らしさを表現することもなく社会の慣行や風習に従い生きていくことの空しさを指摘した発言、自己理論の視点より考察するならば、有機体の自己実現傾向に従い生き抜くことの大切さを隠喩的に表現した発言、また実存主義の視点より解説するならば千万人といえども我往かん(國分, 1980, p. 184)ということであろうか。禅僧が日々の実践を尊重し、無意味な情性を断ち切ろうとする「断捨離」に通じる潔い生きざま(キャリア)が想像される。

(3) 自己愛

中園(1994, pp. 24-34)は、良寛が時空を超えて、日本人の中になつかしさとして生き続けている理由の一つとして自己愛、家族愛、郷土愛の一体化をあげている。換言するならば、自身と周りの環境との一体化の達成である。それは以下の、他人の評価や言動、雑念に感化されない自己を表記した詩作品(松本, 2004a, p. 12)からも推察されることである。

生れてこのかた、立身出世にはトンと気がすすまず、自然のままにふるまっているワイ。頭陀袋の中には米が三升あるし、炉端にはたき木が一束ある。暮しむきはこれで十分だ。誰が迷いだとか悟りだのにとらわれた昔の人の跡を求める必要などあろうか。また、どうして名誉や利益といったこの世の煩わしいことに関わろうか。雨の降る夜は庵の中で、両足を思いのまま伸ばして過ごすばかりだ。(『草堂集114』)

さらに良寛自身、怒りの感情を人に向けることが極めて少なく(松本, 2004b, pp. 131-160)、自己肯定感が高かったものとも推察される。

その裏付けとしては、良寛が江戸の知人宅を訪れた折、その身なりの貧しさから門人に追い返されるが、怒りを表すこともなくその場を立ち去ったという話（山崎，1997，p. 126）や、狂僧から濡れた帯で理由もわからず打たれたにもかかわらず反撃しなかったという話（松本，2009，pp. 20-21），さらには先に述べた囚われの少ない生きざま等をあげることができる。これらからは、怒りや迷い、さらには不安等のネガティブな感情に支配されることなく泰然自若と人々と交わる良寛の姿が推察される。

ちなみに自己肯定感とは、自分に対する自信のことである（岸，2004）。会沢（2010）は、教育相談のめざすものの一つとして自尊感情・自己肯定感の向上をあげているが、非行少年（羽間，2008）や虐待を受けた児童（辻，2008）等は、自己肯定感が低いようである。

ただ良寛自身、怒りや憤りの感情を全く表現しなかったわけではない（松本，2004a，p. 132）。

今、釈迦の弟子といっている僧侶は、仏道を修め勤めることもなく、物事のあり方を究めようとしめない。ただ信者の施しをむだに使い、仏が与えた三つの戒めをも心にかけず、大ぜい集まって思い上がった話を交わし、普通りのまま日々を過ごしている。うわべは悟りを得た顔つきをして、人のいい田舎の老婦をだましている。そして、自分こそやり手だとうぬぼれている。ああ、いつになったら目覚めてくれるのだろうか。たとえ子連れに虎に群れに入るような危い目にあおうとも、僧侶は名誉や利益の道にたずさわってはならない。（『草堂集37』）

上記のように、良寛が当時の仏教界に怒りを向けた作品は他にもある（松本，2004a，pp. 132-139）。ただ良寛の怒りは、個人に対する短絡的な怒りというよりも、墮落傾向にあった当時の仏教界に向けられたものが主であり、自己の保身（自己防衛）に走った怒りとは異なり、極めて超自我

志向の強いものである。

ちなみに良寛の道徳性を、コールバーグの「公正の道徳性」（坂本，2004，p. 161）より考察するならば「社会契約的な法律志向」を超え「普遍的な倫理的原理の志向」の段階、ギリガンの「配慮と責任の道徳性」（坂本，2004，p. 162）より考察するならば「自己犠牲としての善良さ」を超え「善良さから真実へ」さらには「非暴力の道徳性」の段階に達していたように思われる。いずれにしる、両理論の最終段階に極めて近い心理状態にあったものと推察される。

(4) 使命感

もともと私は、托鉢行脚を修行とする僧である。だからどうして、一つの所にとどまっただけでいいのか。仏の教えに合い、悟りの境地に入らないうちは、死ぬまでけっして修行をやめないだろう。（詩75）（松本，2009，p. 66）

良寛さまは、よく人のために進んで病気看護をしてあげたり、食べ物や寝起きのことなど親身な心づかいをなさいました。またよくマッサージをしたり、お灸をすえたりと簡単な施療もしました。施療を受けた人はあんまり具合がいいので、「明日もまたお灸をすえに来てください」とリクエストをしましたが、良寛さまは「明日のことは約束できない」と強いて承諾しません。軽はずみな約束は信用がおけないからなのか、あるいは明日まだ生きているか死んでいるかわからないという理由によるのでしょうか。（『良寛禅師奇話』第22段）（松本，2009，p. 70）

前文が僧侶としての良寛の決意の述べた作品、後文がその決意に従い良寛が活躍する様子を知人が書き残した作品である。両文からは、僧侶としての良寛の強い使命感が感じ取れるが、それは我々教育者にとっても見習うべき心情であり態度

でもある。

なお国立社会保障・人口問題研究所(2008)の世帯動態調査によれば、2011年度の世帯の家族類型は単独31.5%、核家族世帯56.8%と推計されており、家庭教育の中心が祖父母等ではなく両親であることが理解される。すなわち現代においては、両親が子ども達にとって幼少期における最も身近な教育者なのである。

それと同時に、子ども達が日々目にするテレビや電車内の広告、さらには日々交わる大人の態度や衣服・頭髪等も、認知心理学やモデリング(模倣学習)の観点から考察して、多大な影響を子ども達に与えている。我々大人はそのことをもっと強く認識し、早期より社会教育者としての明確な姿勢を例示すべきであると思う。それは全ての大人が、教育者としての姿勢を、真摯に振り返るということでもある。

(5) 実践への努力(言葉ではなく実践で示す)

養老(2003, pp. 169-170)は常々学生に「こんな穴蔵みたいな教室で、俺みたいな爺いの考えを聞いているんじゃない。さっさと外へ行って、体を使って働け」と言っているそうだ。ちなみに良寛は、研究者ではない。実践家である。ひたすらやさしい気持ちを心に抱き、それを周りに伝え続けた実践家であると思う。そこには、地位や名誉に関するこだわりも薄かったものと思われる。それは藩主からの誘いを断った話(山崎, 1997, pp. 134-136)や、五合庵等での質素な暮らしぶりからも推察される。

なお良寛が実践にこだわった証として、松本(2004a, pp. 141-142)は以下のような奇話と良寛自身の漢詩を紹介している。

良寛さまは、わざわざ仏典を引いてお説教をたれたり、善行を積みとか陰徳を施せなんておっしゃるわけでもない。どうかすると台所に回って、カマドの火かげんを見たりして家事にも気配りをなさる。それが一段落すると、ひとり奥座敷でしずかに座禅を組んでおいで

だった。良寛さまが話題にされることは、和歌とか漢詩のむずかしい話でもなく、人間の道はどうあるべきかという訓話でもない。日常の立ち居ふるまいに必要な平凡なことだけで、どういわれたからどうというのでもない。ただ良寛さまの内奥に輝いている、言い知れぬ徳の力というのだろうか、接する人に何ともいえない感化をおよぼしているものようだった。(『良寛禅師奇話』第四十四段)

りっぱな言葉は、いつも出しやすい。しかし、道理を身につけて行なうことは、いつも実行されにくい。それなのに、できもしないりっぱな言葉で、その実行されにくい道理を求めている。だが、りっぱな言葉で求めれば求めるほど、道理は実行されなくなり、言葉に出していえばいうほど、くいちがいが大きくなる。ちょうど火事を消すのに油をかけるようなもので、何の利益もない。(『草堂集128』)

ちなみに、釈迦や夢窓国師も「衆生済度」の目的で各地を転々と行脚している(有馬, 2010, pp. 38-45)。なお良寛の詩の中には、仏法を売り物にしながら、何の実践もせず、その内心に慈悲の心もない売僧の存在を悲しんだ作品や、実践を伴わない雄弁な説教僧(釈迦の教えを説く僧)を批判した作品がある(松本, 2008, pp. 149-151)。さらには農家との親しい付き合いを具体的に描いた詩や『良寛禅師奇話』中における農家を尊重した話(松本, 2008, pp. 62-68)もあるが、それらの作品からは、いかに実践、その中でも農耕を生業とする農家の営みを尊重していたかが推察される。

ただ良寛自身、最初から実践の尊さに気づいていたわけではなかったようである。以下が、それを裏付ける詩作品である(山崎, 1997, p. 55)。ちなみに作中に登場する仙桂和尚は、玉島で修行

していた時の、典座の仙桂和尚と思われる。

仙桂和尚

仙桂和尚は真の道者
黙して言わず、朴にして容（かたちつくら）
ず
三十年国仙の会（え）にありて
禪に参ぜず、経を読まず
宗文の一句も道（い）はず
園菜を作りて大衆（だいしゆ）に供す
当時われこれを見て見ず、
これに遇うて遇はず
ああ今これをならはんとするも得（う）べからず
仙桂和尚は真の道者

教育者は研究者と異なり、先ずは実践があることを認識し、行動が伴うよう努力しなければならないと思う。すなわち師の教えを尊重しながらも、口真似で終わってはいけない。

さらに職業指導の観点からは、良寛が農家を尊重していたように、日々の食糧を産み出す農業に対する認識を強化すべきであるとも思う。ちなみに養老（2003, pp. 195-196）は、食いものを生産する百姓の強さを指摘しているが、江戸時代末までの日本は農業中心の社会であった。そうした時代にあっては、人々はあるがままの自然を大切にし、人間も動物も木も草も、大きな自然の一部だと考え生きていた（武光, 2010, pp. 12-13）。取り返しのつかなくなる前に、その事を再認識すべきであると思う。原発による放射能が、国中に降りそそいでからでは遅いのである。

なお蛇足ながら、著者が以前に平宮夢一郎のペンネームで創作した詩を、実践の大切さという思いを込めて以下に掲載させていただいた（平宮, 1995）。

他者への愛

愛という言葉の意味を
考えたことがありますか

- 愛 他者に好意を抱くこと
- 愛 情熱的に他者を欲すること
- 愛 他人の幸せを心をこめて考え抜くこと

愛 そして実行すること

努力を伴ってこそその愛なんですよ

(6) 「戒語」への戒め

ソシユール言語学が指摘しているように、言葉というものを我々は知らず知らずのうちに、事物の客観的な秩序を写すための道具だと考えているが、実はある特定の時とある特定の地域のみを想定しないと体系化することができないものである（竹田, 1992）。具体的には、関東と関西では語彙や用法、さらには言葉一つ一つの意味が異なるし、子どもと大人、男性と女性、職業間でも異なる。換言するならば、教師やカウンセラーが子どもや保護者に投げかけた言葉が、意思を踏まえ常に正確に伝わるとは限らない訳である。

また言葉は意識の産物でもある（養老, 2009, p. 6）。ゆえに無意識の深いところを、常に正確に表現しているとも限らない。ちなみにゲシュタルト療法（國分, 1980, pp. 239-271）では、先に述べた視線、表情、ジェスチャー、声の調子、身体接触（スキンシップ）等を言葉以上に尊重している（身体が「図」、言葉は「地」）。病理現象とは、こうした身体表現と言語表現のギャップ、換言するならば感情表現と行為のギャップに由来するのである。

なお愛語同様、良寛が常日頃から配慮していたものに良寛創案の戒語（東郷, 1959）がある。戒語とは愛語を徹底させるための禁句や心得とも受け止められる（松本, 2008, pp. 29-30）が、

戒語の使用に関して、良寛自身、強迫的とも思われるくらい気配りを惜しまなかったようである。ちなみに良寛の戒語は、306項目にわたる(松本, 2008, pp. 94-95)。なお戒語とは、以下のような言葉や態度のことである(中園, 1994, pp. 83-91)。

- ① [悟りくさき話/学者くさき話/風雅くさき話/ふしぎの話(とっぴな話)/てがら話/自慢話/いさかい話/ついでなき話(脈絡のない話)/ききとり話(聞いて確かめもしない話)/品に似合わぬ話/人の器量のあるなし(人の顔だちや容貌の善し悪しを話題にする)/己が氏素性を高き人に語る(自分が血筋や家柄がよいように語る)/公儀のさた(政府や政治の批判)/公事の話(公の仕事の話)役人のよしあし(役人の批判)] などの暴言に関する言葉
- ② [悪いとわかっていながら言いとおす/よく知らないことを憚りなく言う/能く心得ぬ事を人に教える/好んで漢語を使う(現在ではさしずめ英語などの外来語か)/都言葉をおぼえしたり顔に言う(都会の言葉を覚えて自慢気に使う)/ことばとがめ(言葉で非難する)/押しのつよさ問わずかたり(人が尋ねもしないのに自分から話す)/物言いのきわどき(下品な話)/くちまね/こわいろ/口をすぼめて物言う/人のことを聞きとらず挨拶する/人の物言いきらぬうちに物言う/人の理由を聞き取らず自分のことを言い通す] などの暴言の下地をつくる態度
- ③ [あの人に言ってよき事をこの人に言う/人のかくす事をあからさまに言う/言葉のたがう(言葉が食い違う)] などの悪口
- ④ [やり終えないうちにそのことを言う/早まり過ぎる/間の切れぬ様に物言う/事ごとに人の返答を聞こうとする/物言いはてしなき/口の早き/言葉の多き/話の長

き/引用の多いのもあきてしまう/引例が違っているは話にならぬ/めずらしき話のかさなる/それほどでもないことを詳細に言う/見ること聞くことを一つ一つ言う/さしてもなき事を論ずる/ふしなき事にふしを立てる/人に物くれぬ先に何々やろうという/与えた後人にその事を語る/たやすく約束する/子どもをだます] などの相手に話す時の留意事項

さらに良寛研究家の市川忠夫氏が、傾向別に分類した35の戒語分類の一部(松本, 2004b, pp. 183-184)は以下の通りである。[多い順に十種記載]

- ① 偽り, ずるさなど誠実なきを戒める
- ② 長話や口数の多いことに関する戒め
- ③ 話し方についての戒め
- ④ 度の過ぎた場合の戒め
- ⑤ 悪口, 意地悪など人のいやがることの戒め
- ⑥ 所をわきまえぬ言動への戒め
- ⑦ うぬぼれの強いことへの戒め
- ⑧ 慎重さのない言葉を戒める
- ⑨ 人を侮辱し, 情なき行為を戒める
- ⑩ 神仏に関する不用意な態度の戒め

言葉は両刃の刃である。良寛は「ことばはおしみおしみ言うべし」という戒語(久馬, 2010, p. 62)も残しているが、言葉は使い方によっては愛語にもなるし戒語にもなる。

また言葉というのは、人間が持っている機能のごく一部に過ぎず、言葉によってすべてを規定しようとすることは何か無理がある(養老, 2004, pp. 155-157)。さらにソシユールの言語学が指摘しているように、地域社会や年代、さらには性別、役割、民族等によっても、言葉のもつ意味合いは異なってくる。良寛の戒語は、そのことを後世の人々、特に教師・カウンセラー・親等、教育に携わる人々へ伝授しているようにも思われる。

(7) 地域密着（郷土愛・自然愛）

教育者は大学や研究所等での研究者と異なり、対象となる人々への教育活動が第一の責務となる。そのため家族や友人、地域の人々等、自身が活動する地域社会（準拠集団）の人々との連携（繋がり）が不可欠となってくる。

ちなみにハイデガーは、ヘンダーリンの詩を手がかりとして「故郷」の概念を丹念に追及した。なお故郷とは、その人自身（自身の最も固有なるもの）を育み育てて、その人をその人たらしめる彼自身の根源のことである。また人々にとって故郷とは、最も近きもの、最も親しきものでもある（市倉，1997，pp. 36-37）。2011年東日本大震災の折、生死を交え、故郷を後にした多くの人々の存在があったが、その無念さ、寂しさ、悲しさは言語に絶するものであったことと思う（対象喪失）。その思いを想像するだけで、涙が溢れお返しする言葉もない。

なお39歳のころ故郷越後に帰郷した良寛は、74歳で没するまで国上山五合庵や国上山の麓の乙子神社の草庵、さらには島崎（長岡市）の木村元右衛門の裏庭の庵室で過ごしている（松本，2008，p. 6）。すなわち、故郷越後が活動の拠点であり、逸話の多くも越後を中心に展開されている。

ちなみに欧米の思想は、森林を克服の対象とする思想であった。キリスト教では、オアシスに至る道は一つしかなく、世の中の答えはすべて一つで、他を否定するという考えに基づいている（矢部，2002）。多神教（八百万の神）を背景とする日本古来の思想とは異なるが、戦後の日本の欧米化傾向は、いつしか市場競争原理のもと、一極の答え（金や名誉、勝利等）のみを追い求め、身近な人々や自然への畏敬の念が薄れてきているようにも思われる。換言するならば、他人や地域、自然への配慮の希薄化である。地産地消が叫ばれる現代社会において、地方の活性化という観点からも、地域ならではの独自性（リソース）に再度目を向けることが重要と思われる。

(8) 子どもと戯れる（ボランティア活動）

心理・対人面に関する教育の目標としては、社会への適応（現実原則の学習）、道徳性（超自我）の形成、感情に流されない理性的（ラショナル）で柔軟な思考習慣、さらには人間関係形成能力の定着等をあげることができるが、カウンセリングの目標には、遊びなどによる無意識的抑圧からの解放という臨床的な要素も含まれる。

ただ良寛の遊びは、遊戯療法といった役割や形式にとらわれたものではない。自身も遊びを待ち望み、子ども達と一体となり、喜び楽しむといったところにその特徴がある。これまで人間が培ってきた「欲」の文化（新谷，2005，pp. 195-199）とは異なり、極めて自発的でボランティア精神に富んだものである。

なお良寛が子ども達と遊ぶのは、地域から求められるでもなく求められていた余分なサービルであった（松本，2009，p. 72）。ただその中には、現代でいうところのいじめに相当する出来事もあったようである（松本，2009，pp. 16-21）。すなわち愛に満たされない、あるいは親から放任された子ども達の残虐性・攻撃性には当然気づいていたものと推察される。それでも良寛は遊び続けた。

ちなみに二つの出来事が因果関係なしに、しかし意味の上では深く関わりながら、同時に起こることを共時性（シンクロニシティ）（岩田，1993，pp. 127-168）というが、良寛の遊びは、宗教と遊びが深いところで連続していたようにも推察される。それは又、十牛図における入麴垂手、すなわち悟りを得た修行者が里に帰っていき童子と遊ぶ姿（有馬，2010）を想起させるものでもある。

なお養老（2009，pp. 176-177）は、意識的に設計したものでないことを根拠に、子どもは自然であると指摘しているが、山中に建立された五合庵での暮らしを続けた良寛にとって、子どもは自然同様、極めて愛おしい存在であったものと推察される。自然と子ども達、分け隔てることなく愛

した良寛のおおらかで人懐こいパーソナリティ（人柄）が想像される。それはある意味、市場競争原理に毒されていない当時の日本人を象徴するようなパーソナリティ（人柄）だったといえるかもしれない。

(9) やさしさの意識（気）の循環

良寛にとってのやさしさとは、慈愛の情に満ちたものであった。それは数々の自然をうたった詩歌や筈のために廁を消失した話（久馬，2010，pp. 106-111），さらには天然痘によって相次いで子どもを亡くした親に送った歌（例：人の子の遊ぶを見ればにはたづみ 流るるなみだとどめかねつも）（松本，2004a，pp. 170-173）等からも推察される。

また良寛のやさしさは、周囲の人々にも循環した。以下は、それを裏付ける良寛が解良家にやってきた時の様子を記した話である（松本，2004a，p. 140）。

良寛さまは、わが家にふらりとやってこられて、二晩かそれ以上も泊まっていられることがあった。良寛さまが見えたとわが家では主人と家族や使用人たちが、みんな和やかに睦みあって和気あいあいの気分を満たされる。良寛さまが帰られたあとも、数日のあいだ家内の者はみな明るく打ちとけているのが常だった。炉端で、良寛さまと一晩でも語ることがあると、心の底からしみじみと胸襟を開く心境になり、思わず虚飾を捨ててすがすがしい気持ちになることができた。『良寛禅師奇話』44

なお著者は以前、教育カウンセリング場面における循環を「意識の循環」「思考の循環」「システムの循環」「縄文思潮における循環」の視点より論じた（平宮，2008）ことがあるが、上記の話はまさに良寛のやさしさ（慈愛の情）が、知らず知らずのうちに、周囲に循環した出来事としても受け止められる。

ちなみに中国で、古くから行われた健康法に気

功があるが、気功とは、宇宙もしくは地球がもつ未知の力を活用する行為（武光，2010，pp. 80-86）のことである。なお黒木（1998，p. 210）は、「セラピストという職人の道を歩き続けていくと、技法などが不必要となり、何もしなくても「ただそこに居る」だけで、クライアントの自然治癒力が活性化される域があるのであろう」と記しているが、まさに良寛の上記の話に通じる記載とも受け止められる。

(10) 涙

良寛は、よく涙を流す人だったらしい（久馬，2010）。ちなみに國分・國分（1987）は、非行少年との別れに際して良寛が涙を流した話を紹介している。なおここでの涙は、自我の弱さよりすぐに泣く子どもの涙（國分，2004）とは異なる涙である。快樂主義的・自己焦点的思考（坂本，2004）から流れる涙とも異なる。ある意味、教育者としての慈愛の情から流れた涙と推察されるものである。

なお著者自身、「生きる」をテーマとしての詩作活用エクササイズにおいて、感涙に関する体験が見出されたことを報告した（平宮，2011）。また養老（2004，pp. 175-177）は、挨拶が苦手なこと、父の死の結びつきに気づき涙した体験を記している。涙とはある意味、無意識の抑圧から自身を解放してくれるものである。逆に、解放されるから涙が出るのかもしれない。それは養老（2004，pp. 177-181）の、挨拶というものがその後、気にならなくなったという事実からも推察されることである。

教育やカウンセリング場面における涙に関しては、今後さらなる検討が必要と思われるが、涙を流すほどの愛情や感受性の大切さを、良寛の生きざまは後世の人々に伝えているように思われる。母との別れをおしみ涙ぐむ良寛、学問の師を弔い涙する良寛（久馬，2010），さらには当時流行した疱瘡で死んだ子を思うあまり、元気で遊ぶよその子を見て涙する良寛（松本，2008，p. 98）等、良寛は数多くの場面で人目をはばかることもなく

涙を流している。この事実は、自身の感情や体感に正直に生きる（実存的）ことの大切さを、我々教師やカウンセラー、さらには子をもつ親に教授しているようにも思われるのである。

(11) わかちあい（両親との愛の交流）

良寛には、所有を示すための名前を書いたものが残っていない。名前を書く代わりに「おれがの」や「ほんにおれがの」と書き残している。さらに自分の持ち物に「おれがの」と書いただけではなく、他から借りた書物の見返しにも「ほんにおれがの」と書きつけている（松本, 2008, pp. 186-187）。また良寛は、寝ていた布団に目をつけこれを持っていこうとする泥棒に、寝返りを打つような仕草で盗み去らせている（松本, 2008, pp. 183-185）。すなわち所有に対する意識が、極めて薄く恬淡である。なお松本（2004b, pp. 135-136）は、良寛のこのような所業を「奪い合えば足らず、分け合えば余る」という題目で解説している。

ちなみに日本の縄文時代においては、「円の発想」というすべてのものを平等に扱おうとする考えのもと、平等な立場で円形に人が集まり仲よく生活していた（武光, 2003, pp. 86-88.）。そこでは、身分の上下や貧富の差が見られず、人間も動物、植物、風、雨の自然現象に至るまで、平等な存在とみなされていた。ある意味、良寛の上記のような逸話は、この「円の発想」に通じるものとも考えられる。それは良寛の稲の吼える声を聴こうとする話（松本, 2008, p. 64）や「良寛さまと雀」「しらみの競争」（相馬, 2007）、さらには先にも記した、幼児三人を連れた女乞食に、庄屋の解良家への紹介状を書いた話（松本, 2009, pp. 50-51）等にも通じることである。

なお良寛の書は、日本美の極致といわれるほど高い評価を受けている（加藤, 2007）が、この所有欲の低さの一因として詩歌や書の制作が推察される。すなわち、詩歌や書の制作及びその作品の社会的称賛を通しての自身の欲の昇華である。

ただ著者自身、それ以上に両親との強い絆（中

園, 1994, pp. 24-34.）を一因として推察している。すなわち限りなく深い両親との愛の交流の存在である。ちなみに國分（1982, p. 89）は、子どもは父母の両方を好きになる経験と父母の両方から好かれる経験をして、始めて一人前になれると述べているが、それは良寛に対しても当てはまることであろう。ちなみに以下は、出家の折、良寛が創作した作品である（中園, 1994, pp. 30-32.）。

題しらず

うつせみは 常なきものと
 むら肝の 心にもいて
 家をいで うからはなれ
 浮雲の 雲のまにまに
 ゆく水の ゆくへもしらず
 草枕 たびゆく時に
 たらちねの 母にわかれを
 つげたれば 今はこの世の
 なごりや 思ひましけむ
 涙ぐみ 手に手をとりにて
 わがおもを つくづくと見し
 おもかげは なお目の前に
 あるごとし
 父にいとまを こひければ
 父がかたらく よをすてし
 すてがいなしと 世の人に
 いはるなゆめと いひしこと
 今もきくごと おもほえぬ
 母が心の むつまじき
 そのむつまじき みこころを
 はふらすまじと 思ひてぞ
 つねあはれみの こころもし
 うき世のひとに むかひつれ
 父がことばの いつくしき
 このいつくしき みことばを
 思ひいでては つかのまも
 のりの教を くたさじと
 朝な夕なに いましめつ

このふたつを 父母が
かたみとなさむ わがいのち
この世のなかに あらむかぎりは

終わりに、現代は常に他者の視線を気にしなければならない時代である。その代表が「監視カメラ」の存在であろうが、それは「自分が見られているかもしれない」という状態を自らに言い聞かせるようなもので、視点を変えれば監視施設に収容されているのと何ら変わらない（今村・栗原、1999）。人々は、目に見えない社会という監視者のもとで日々暮さざるえない状態であり、必然的に他者やものとの間に心の壁を作ってしまう。さらに村上（2008, p. 197）が、DNA研究の視点より記した次の世代を生かすという思考や、私たちの体が借り物だからとする思考も極めて淡泊なように感じられる。

ただそんな時代だからこそ、両親は限りなく深い愛を我が子に捧げ続けると同時に、子ども達にとっての畏敬の対象、依存の対象となるよう努力して欲しいと願う。

具体的には、大相撲の白鵬が15歳まで両親の間で寝ていたように、親子での非言語的交流（スキンシップ等）の大切さを再認識し行動に移せばよい。父親は社会の代表者として、毅然とした態度で子ども達に接すればよい。母親は社会の常識に左右されることなく、子ども達を愛し続ければよい。そして夫婦が、一枚岩になればよい。

限りなく深い愛の意識と実践は、子ども達にとって何にも増してかけがえのない存在なのである。

【引用・参考文献】

- 会沢信彦・平宮正志（2008a）. 大学生が経験したい
じめの質的分析(1)—小学校1～3年時の経験— 文
教大学生生活科学研究所生活科学研究, **30**, 197-
205.
- 会沢信彦・平宮正志（2008b）. 大学生が経験したい
じめの質的分析(2)—小学校4～6年時の経験— 文
教大学教育学部紀要, **42**, 11-18.

- 会沢信彦・平宮正志（2009）. 大学生が経験したい
じめの質的分析(3)—中学校1～3年時の経験— 文
教大学教育学部紀要, **43**, 5-12.
- 会沢信彦（2010）. 学校教育と教育相談 会沢信彦・
安齊順子（編）教師のたまごのための教育相談 北
樹出版 pp. 12-23.
- 有馬頼底（2010）. 禅, 「持たない」生き方 三笠書
房 p. 35. p. 211.
- 独立行政法人統計センター（2009）. 平成6年度から
平成17年度までのいじめの発生学校数・発件数
（公立小・中・高等・特殊教育諸学校）
<<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001063286>>（2011年6月12日）
- 羽間京子（2008）. 非行少年に対する精神分析的カウ
ンセリング 國分康孝（監修）カウンセリング心理
学事典 誠信書房 pp. 394-396.
- 平宮正志（2008）. 教育カウンセリング場面における
循環 二松學舎大学論集, **51**, 47-60.
- 平宮正志（2009a）. 良寛を通しての道德教育 —学
習指導要領の改訂告示をふまえて— 二松學舎大学
論集, **52**, 15-35.
- 平宮正志（2009b）. 学校におけるカウンセリング
服部環（監修）安齊順子・荷方邦夫（編）「使える」
教育心理学 pp. 141-155.
- 平宮正志（2010a）. 教育とカウンセリングの視点よ
りみた日本の詩歌の歴史的考察 —読書療法, 詩
歌療法, poetry therapyの起源と現状を列記し
て— 二松學舎大学論集, **53**, 45-63.
- 平宮正志（2010b）. 実存主義とサティ理論をふま
えての生徒指導 —愛のある教育を目指して— 二松
學舎大学東アジア学術総合研究所, **40**, 左1-左
23.
- 平宮正志（2011）. 「生きる」をテーマとした詩作活用
エクササイズの潜在的効果を探る研究 —構成的グ
ループエンカウンターのエクササイズとして— 二
松學舎大学学術総合研究所, **41**, 左23-左39.
- 平宮夢一郎（1995）. 詩集 六月十日 時の流沙 桂
書房
- 今村仁司・栗原仁（1999）. フーコー 清水書院 pp.
107-144.
- 市倉宏裕（1997）. ハイデガーとサルトルと詩人たち
NHKブックス
- 岩田慶治（1993）. アニミズム時代 法藏館
- 加藤惇一（2007）. ほっとする良寛さんの般若心経
二玄社 pp. 16-24.
- 岸俊彦（2004）. 対話のある授業 NPO日本教育カウ

- ンセラー協会（編）教育カウンセラー標準テキスト
初級編 図書文化 pp. 126-136.
- 國分久子（2004）. 精神分析理論 NPO日本教育カウンセラー協会（編）教育カウンセラー標準テキスト
初級編 図書文化 pp. 36-46.
- 國分康孝（1980）. カウンセリングの理論 誠信書房
- 國分康孝（1982）. カウンセリングと精神分析 誠信書房
- 國分康孝・國分久子（1987）. 男性の心理 福村出版
pp. 158-160.
- 國分康孝（1996）. カウンセリングの原理 誠信書房
pp. 117-134.
- 国立社会保障・人口問題研究所（2008）. 『日本の世帯数の将来推計（全国推計）』（2008年3月推計）について
<<http://www.ipss.go.jp/pp-ajsetai/j/HPRJ2008/t-page.asp>>（2011年8月30日）
- 黒木賢一（1998）. 〈気〉の心理療法 三木善彦・黒木賢一（共編）日本の心理療法 朱鷺書房 pp. 197-223.
- 久馬慧忠（2010）. 良寛の涙 法藏館
- 松本市壽（2004a）. ヘタな人生論より良寛の生きざま 河出書房新社
- 松本市壽（2004b）. 良寛さま グラフ社
- 松本市壽（2008）. 良寛のスローライフ NHK出版
活人新書257
- 松本市壽（2009）. 困ったときの良寛さん 三笠書房
- 新谷弘実（2005）. 病気にならない生き方 サンマーク出版
- 文部科学省（2011）. 新学習指導要領・生きる力 第3章道徳
<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/dou.htm#3_4gakunen>（2011年9月5日）
- 村上和雄（2008）. アホは神の望み サンマーク出版
- 中園正身（1994）. 幼形熟成の人 良寛—生き方の心理学研究ノート— 宣協社
- 坂本真士（2004）. 社会性を育む 桜井茂男（編）たのしく学べる最新教育心理学—教職にかかわるすべての人に— 図書文化 pp. 153-172.
- 相馬御風（2007）. 良寛さま 考古堂
- Suttie, Ian D. (1935). *The Origin of Love and Hate*. London: Penguin Books. (サテイ, I. D. 國分康孝・國分久子・細井八重子・吉田博子（訳）（2000）. 心理学選書①愛憎の起源 黎明書房）
- 竹田青詞（1992）. 現代思想の冒険 ちくま学芸文庫
pp. 44-45.
- 武光誠（2003）. 日本人なら知っておきたい神道 KAWADE夢新書
- 武光誠（2010）. 日本人なら知っておきたい陰陽道の知恵 KAWADE夢新書
- 竹村健一（2002）. 「荀子」人生で学ぶべきこと リュウ・ブックスアステ新書
- 竹村健一（2008）. いい加減力 太陽企画出版
- 東郷豊春（1959）. 良寛全集 下巻 東京創元社 pp. 393-418.
- 辻隆造（2008）. 被虐待のアセスメント 國分康孝（監修）カウンセリング心理学事典 誠信書房 pp. 113-115.
- 矢部三雄（2002）. 森の力 日本列島は森林博物館だ！ 講談社+a新書 pp. 226-228.
- 山崎昇（1997）. 良寛 清水書院
- 養老孟司（2003）. バカの壁 新潮社
- 養老孟司（2004）. 死の壁 新潮社
- 養老孟司（2009）. 読まない力 PHP新書
- 和田秀樹（2010）. テレビの大罪 新潮新書
- Walsh, D. (1994). *Selling out America's children*. National Book Network. (小田玲子訳 1998 テレビ汚染とアメリカの子どもたち 八潮出版社)